

# 日本語・日本事情

## 1 構 成 員

	平成 13 年 3 月 31 日現在	
教授	1 人	
助教授	0 人	
助手（うち病院籍）	0 人	（ 人）
大学院学生（うち他講座から）	0 人	（ 人）
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技官	0 人	
その他（技術補佐員等）	0 人	
合計	1 人	

## 2 教官の異動状況

佐藤 清昭（教授）（期間中現職）

## 3 研究業績

	平成 12 年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	1 編	(1 編)
そのインパクトファクターの合計	0	
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0 編	
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0 編	
そのインパクトファクターの合計	0	( 編)
(4) 著書数（うち邦文のもの）	1 編	(1 編)
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0 編	( 編)
(6) 国際学会発表数	0 編	

### (1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 佐藤清昭 (2000) 関口存男による前置詞の意味分類。－「激突急停止の in」(ほか)と「前置詞論」－。ドイツ語学研究(冠詞研究会) 10: 11-48.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの(学内の共同研究)

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

- D. 筆頭著者，共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが，当該教室に所属する者が含まれるもの

## (2) 論文形式のプロシーディングズ

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの
- D. 筆頭著者，共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが，当該教室に所属する者が含まれるもの

## (3) 総 説

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの
- D. 筆頭著者，共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが，当該教室に所属する者が含まれるもの

## (4) 著 書

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの  
佐藤清昭（2000）中級へのドイツ語．小説を読む － ベル：気まぐれな客たち．
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの
- D. 筆頭著者，共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが，当該教室に所属する者が含まれるもの

## (5) 症例報告

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの
- D. 筆頭著者、共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが、当該教室に所属する者が含まれるもの

## (6) 国際学会発表

### 4 特許等の出願状況

	平成 12 年度
特許取得数（出願中含む）	0 件

### 5 医学研究費取得状況

	平成 12 年度
(1) 文部省科学研究費	0 件 ( 万円)
(2) 厚生省科学研究費	0 件 ( 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件 ( 万円)
(4) 財団助成金	0 件 ( 万円)
(5) 受託研究または共同研究	0 件 ( 万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0 件 ( 万円)

### 6 特定研究などの大型プロジェクトの代表，総括

### 7 学会活動

	平成 12 年度
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件
(2) 国際・国内シンポジウム発表数	0 件
(3) 学会座長回数	0 件
(4) 学会開催回数	0 件
(5) 学会役員等回数	0 件

## 8 学術雑誌の編集への貢献

	平成 12 年度
学術雑誌編集数	0 件

## 9 共同研究の実施状況

	平成 12 年度
(1) 国際共同研究	0 件
(2) 国内共同研究	0 件
(3) 学内共同研究	0 件

## 10 産学共同研究

	平成 12 年度
産学共同研究	0 件

## 11 受賞（学会賞等）

## 12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

### 1. 関口存男文例集の利用の可能性

関口存男（1894-1958）は、大著「冠詞」（1960/61/62）に代表される数多くの著作論文を通じて、「意味形態論」という独自の言語理論を展開した。「意味形態論」は「統合文法」の観点に立つものである。つまりその基礎には、「言語的に表現しうる普遍的な思考内容」から「各個別言語の文法表現手段」にいたるといふ言語研究の方向が存在する。関口はこの「統合文法」的研究の方法により、現代言語学において中心的な役割をはたす数多くの見地を先取りした業績を残した。

関口のこの研究の背後には、彼が 30 年以上にわたり収集を続けた 24,500 ページにおよぶ「文例集」の存在があるが、この資料は現在まで注目を浴びることが少なく、またそれが研究者の目に触れた場合でも、積極的に利用されることはなかった。

この資料を詳細に検討することにより、これを他の研究者が有効に利用することが可能であるかどうかを検証する。

（佐藤清昭）

### 2. 「前置詞論」の執筆

関口存男は前置詞について、ドイツ語をはじめとする 10 以上の個別言語から用例を集めている。それらの大部分はインパクトの強い名称によって整理された。例えば「激突急停止の in」、「展張限度の an」、「偽装韜晦の unter」などである。しかし関口は、これらの用語やその具体的な用例を系統づけて説明することをしなかった。

これら関口による前置詞の用法に「佐藤による用法と文例」を加え、それらを、近代言語学の研究によって得られた客観的な観点（「上位概念」と「下位概念」の区別、「意味の 3 レベル」の区別）に基づいて秩序づけるなら、単にドイツ語に限らない「普遍的」観点に基づいた「前置詞論」が生まれること

になる。

(佐藤清昭)

### 13 この期間中の特筆すべき業績，新技術の開発

1. 「前置詞論」執筆の第一歩として，関口が行った「前置詞の意味分類」をその全著作，および文例集から体系的に抜き出し，代表的な例文とともに提示した（「関口存男による前置詞の意味分類」参照）。
2. 上記の関口存男の業績を啓蒙的観点から紹介し，発展応用させたものとして中級者用の参考書をシリーズで執筆することを計画しているが，その第1巻を出版した（「中級へのドイツ語。小説を読む - ベル：気まぐれな客たち」参照）。

### 14 研究の独創性，国際性，継続性，応用性

関口存男の業績はヨーロッパにおいても知られつつあり，例えば 1995 年以来ドイツで定期的に行われている Ost-West-Kolloquium (2002 年 3 月には神戸にて開催予定) においても常に中心的なテーマをなしている (例えば以下を参照: K. Sato: Tsugio Sekiguchi und seine "synthetische" Grammatik. In: E. Coseriu u. a. (Hrsg.): Sprachwissenschaftsgeschichte und Sprachforschung, Tuebingen 1996, 213-216)。特に文例集は，Eugenio Coseriu と佐藤による通覧と評価を経て，例えば Wilfried Kuerscher の「否定」冊についての論文ほかで学問的議論の対象となっている。

関口の文例集が膨大なものであり，しかも多くの個別言語の例文を含んでいることから，文例集そのものについての調査・検討は，今後継続されていくであろう。また「前置詞論」の執筆も，佐藤独自による文例の収集，全体の詳細な検討などのために数年を要すると思う。この「前置詞論」の執筆のプロジェクトは，将来の「副詞論」ほかのために敷設されたレールとなるであろう。

### 15 新聞，雑誌等による報道